

いま、倉橋と出会う

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供歌舞』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問い合わせにしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

生える力、伸びる力。それに驚く心がなくては、自然も子どもも、ほんとうには分からない。が、驚きだけでは、詩と研究とが生まれても、教育にはならない。教育者は詠嘆者たるだけではないからである。子どもの力に絶えず驚きながら、その詠嘆のひまもすきもない程に、こまかい心づかいに忙しいのが教育であり、教育者である。

教育のめざすところは大きい。教育者の希望は遠い。しかし、其の日々の仕事はこまごまと極めて手近なことである。丁度、園芸の目的は花にあり果実にありながら、園丁の仕事があの通りなのと同じである。よき園芸家とは、まめな人である。実際に行き届く人である。休む間もない気くばりに、目と手と足の絶えず働いている人である。やがて咲かせたい花のこととも、熟させたい果実のこととも、手を開けて思う間もない程に、目の前の世話に忠実な人である。

驚く心がそのまますぐ実際のまめやかさになる人、そういう人が実際教育者である。